

学校の自走をアシストⅡ！校内研究を支援するための方策（1年次）

島根県教育センター浜田教育センター
研究・研修スタッフ 共同研究

目 次

【要旨】	1
1 研究の背景	1
2 研究の目的	2
3 研究の方法	2
4 研究の内容	
(1) 島根県教育センター、浜田教育センターが作成した成果物の分析	2
(2) 研究主任へのアンケートの実施	2
① アンケートの方法	2
② 結果と考察	
ア 「研究のテーマ決めに関して」（質問番号1～3）の結果と考察	6
イ 「教職員の研究に対する意識について」（質問番号4～6）の結果と考察	8
ウ 「参考資料について」（質問番号7～9）の結果と考察	9
エ 「研究の成果等について」（質問番号10～14）の結果と考察	10
(3) 研究主任に向けた冊子「はじめての研究主任ガイド」の作成	
① 作成の基本方針	15
② 研究主任の「声」から考える	
ア Q&A方式での解説	16
イ 情報のハブ的機能	17
ウ 実際の「声」から	17
③ 研究の進め方を考える	
ア PDCAサイクルを意識した構成	18
イ 研究構想の立て方	18
ウ 年間スケジュールの例示	19
エ 授業研究と授業協議	19
④ 学習指導案の書き方を考える	
ア 学習指導案作成手順例	20
イ 「チェックポイント」の提示	20
ウ 学習指導案例	21
エ 学習指導案に関する資料	21
5 おわりに	22
【引用文献】	23
【参考文献】	23

学校の自走をアシストⅡ！校内研究を支援するための方策

(1年次)

島根県教育センター浜田教育センター 研究・研修スタッフ 共同研究

【要 旨】

研究主任に向けたアンケート（以下、アンケートとする）の結果から、研究の進め方や研究協議のもち方等で悩んでおり、具体的で分かりやすい参考資料を求めていることが明らかになった。そこで、本研究は、平成20年3月に浜田教育センターで作成された「ウォーミングアップブック～研究の進め方・学習指導案の書き方 入門編～」をベースにし、初めて研究主任になる教員にも分かりやすく、読みやすい冊子を作成することで、校内研究の充実が図られることを目指した。

今年度はアンケートの回答を受けて、初めて研究主任になる教員のための冊子を作成したが、その後の検証には至っていない。今後は内容が適切であったかも含めて、利用状況について検証していきたい。

【キーワード：研究主任 校内研究 研究の進め方 学習指導案】

1 研究の背景

令和4年5月に「教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律」が改訂され、教員免許更新制を発展的に解消し、「新たな教師の学びの姿」を実現する体制を構築することとなった。その際、教師の資質能力の向上に必要であるとされたのが、「教員研修の高度化」である。

「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）」（令和4年）では、「新たな教師の学びの姿」として、以下の4つが示された。

- ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
- ・求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
- ・新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
- ・他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」

引用

また、今後の研修の在り方について、「座学等を中心とする『知識伝達型』の学習コンテンツを受け身の姿勢で学ぶだけではなく、個別最適な学びとの往還も意識しながら、他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びにおいて確保するなど、協働的な教師の学びも重視される必要がある。こうした機会としては、例えば各学校において行われる校内研修や授業研究など、『現場の経験』を含む学びが、同僚との学び合いなどを含む場として重要である。」としている。

「新たな教師の学びの姿」は子どもの学びの姿の相似形として示されており、教師の学びは、教師の個性に即した個別最適な学びを行いながらも、校内研修や授業研究などを通して同僚との学び合いを行うことが大切であるといえる。そのため、これまで伝統的に行われている「校内研究」を充実させることが「教育研修の高度化」を達成するための手立ての一つであると考えられる。

島根県では、今年度から小・中学校研究主任等研修を悉皆研修とした。そこでは、「校内研究の意義及び研究主任の果たすべき役割等を学ぶとともに、授業改善を目的とした校内研究の企画・運営上の工夫を学び、校内研究を推進する指導力の向上を図る」ことを目的としている。その背景には、昨今の働き方改革からも分かるように、教師の業務が多様化しているため、授業改善のための時間が確保しにくくなっていることが挙げられる。さらに、学校外での研修を受けに行く時間的余裕がなく、教師が選択して研修を受ける機会が少なくなっていることが教育センター主催による希望者研修の受講者数の推移からも読み取れる。これらの現状からも、校内研究を充実させることで教師の学ぶ機会を確保することが喫緊の課題であると考ええる。

そのため、島根県内の小学校、中学校、義務教育学校にアンケートを行い、まずは校内研究の現状を知ることとした。その後、その回答を分析し、各学校が校内研究を充実させるために必要としている情報等を精選し、学校の自走をアシストするための方略を考えていきたい。

2 研究の目的

本研究は、校内研究の充実を図るために、どのような手立てが有効かを明らかにすることを目的とする。

3 研究の方法

- (1) 島根県教育センター、島根県教育センター浜田教育センター（以下、浜田教育センターとする）が作成してきた校内研究や校内研修に関する成果物や書籍等を収集し、校内研究の充実に向けての情報を整理・分析する。
- (2) 島根県内の小学校、中学校、義務教育学校の研究主任にアンケートを依頼し、その回答の分析をもとに実態を把握し、どのような手立てが有効かを検討する。

4 研究の内容

(1) 島根県教育センター、浜田教育センターが作成した成果物の分析

これまで、島根県教育センター、浜田教育センターでは、校内研究に関する資料として、「ウォーミングアップブック」「校内研究・研修ハンドブック」等を発行してきた。アンケートからも、特に「校内研究・研修ハンドブック」の知名度は高い。しかし、ともに発刊されてから15年程度たっており、刊行物内で例として紹介している観点項目やコンテンツが現在の視点や観点と合っていない現状があることが分かった。

(2) 研究主任へのアンケートの実施

学校の現状を把握するため、県内の各小学校、中学校、義務教育学校の研究主任にアンケートを行った。

① アンケートの方法

各小・中学校、義務教育学校の研究主任に対してメールを送付し、アンケートに回答してもらう形で調査を行った。そのうち返答のあった191校の回答の分析を行った。以下の**表1**にアンケート項目を示す。

表1 アンケート項目

質問カテゴリー	質問番号	質問項目	回答項目
研究のテーマ決めに関して	1	今年度、あなたの勤務校での校内研究テーマをお書きください。	<記述式>
	2	校内研究のテーマを決めた時期は何月頃ですか。	<選択式> <input type="checkbox"/> 昨年度のうち <input type="checkbox"/> 4月 <input type="checkbox"/> 5月 <input type="checkbox"/> 6月 <input type="checkbox"/> 7月 <input type="checkbox"/> 8月 <input type="checkbox"/> その他
	3	そのテーマ等にした理由や経緯をお選びください。	<選択式> <input type="checkbox"/> 国や県の方針に基づいたテーマだから <input type="checkbox"/> 研究大会等での公開授業や実践発表に合わせたテーマだから <input type="checkbox"/> 学校の課題を解決するためのテーマだから <input type="checkbox"/> 教職員から希望のあったテーマだから <input type="checkbox"/> その他
教職員の研究に対する意識について	4	教職員は校内研究に主体的に取り組んでいますか。	<選択式> <input type="checkbox"/> そう思う <input type="checkbox"/> まあまあそう思う <input type="checkbox"/> あまりそう思わない <input type="checkbox"/> そう思わない
	5	校内研究に対して、全教職員が共通認識のもと進められていますか。（*「共通認識」とは、共通の目標や思い等とお考えください）	<選択式> <input type="checkbox"/> そう思う <input type="checkbox"/> まあまあそう思う <input type="checkbox"/> あまりそう思わない <input type="checkbox"/> そう思わない
	6	校内研究に対して教職員は年間の見通しをもって取り組んでいますか。	<選択式> <input type="checkbox"/> そう思う <input type="checkbox"/> まあまあそう思う <input type="checkbox"/> あまりそう思わない <input type="checkbox"/> そう思わない

表1 アンケート項目

参考資料について	7	研究をはじめたり進めたりするにあたり、どのような資料を参考にしましたか（複数選択可）。	<p><選択式></p> <input type="checkbox"/> 「ウォーミングアップブック」（浜田教育センター発行物） <input type="checkbox"/> 「校内研究・研修ハンドブック」（島根県教育センター発行物） <input type="checkbox"/> 「カリキュラム・マネジメントハンドブック」（浜田教育センター発行物） <input type="checkbox"/> 「今の学び方をちょこっと変えルートマップ」「充実ナビゲーション」（浜田教育センター発行物） <input type="checkbox"/> 特に参考にしたものはない <input type="checkbox"/> その他
	8	上の資料はどのようにして入手されましたか（複数選択可）。	<p><選択式></p> <input type="checkbox"/> 島根県教育センターのホームページ <input type="checkbox"/> 島根県が作成したリーフレット等 <input type="checkbox"/> 書籍 <input type="checkbox"/> インターネット <input type="checkbox"/> その他
	9	研究を進めるにあたり、どのような資料があればよかったと思いますか。	<記述式>
研究の成果等について	10	校内研究の効果を以下からお選びください（複数回答可）。	<input type="checkbox"/> 教職員間のチームワークが高まる <input type="checkbox"/> 児童生徒の実態についての情報交換が進む <input type="checkbox"/> 教員の授業力が向上する <input type="checkbox"/> 教員個々の悩みを相談し合える <input type="checkbox"/> 教室掲示や教材づくりなど指導のアイデアが増える <input type="checkbox"/> クラス替え、担任交代があった時にも学びの積み上げがしやすい <input type="checkbox"/> 研究紀要等を作成することで、翌年新たに着任した教員にも情報共有ができる <input type="checkbox"/> 特にない <input type="checkbox"/> その他

表1 アンケート項目

研究の成果等について	11	校内研究について課題に感じられることを以下からお選びください（複数回答可）。	<p><選択式></p> <input type="checkbox"/> 研究主任や授業者など、一部の教員にだけ負担感のあるものになる <input type="checkbox"/> 勤務時間内に研究や授業が終わらない <input type="checkbox"/> 「大会や研究授業の時だけ」など、一時的なものになってしまう <input type="checkbox"/> 必要感がないまま授業や業務が与えられ、やらされ感のあるものになる <input type="checkbox"/> 指導法など、理解を誤ったまま校内で共有されてしまう <input type="checkbox"/> スケジュール調整がうまくいかずに、一定期間に大変な苦勞を要するものになる <input type="checkbox"/> 児童生徒のよりよい学びや成長に寄与しているように感じられない <input type="checkbox"/> 特にない <input type="checkbox"/> その他
	12	校内研究は教職員にとって良い学びの機会となり、児童生徒や日々の仕事に還元されていると感じますか。	<p><選択式></p> <input type="checkbox"/> そう思う <input type="checkbox"/> まあまあそう思う <input type="checkbox"/> あまりそう思わない <input type="checkbox"/> そう思わない
	13	（自由記述）校内研究を充実させるためにはどのようなことが必要だと思いますか。これまでの質問でお答え切れないことがありましたらお書きください。	<記述式>
	14	（自由記述）研究主任として思われることがありましたらお書きください。	<記述式>

図2の共起キーワードとして、【ICT】【活用】に強い共起があり、【豊か】【関わり】【合い】や【自他】【認める】【よい】が共起している。このことから、新たに学校における基盤的なツールとなるICTの活用や、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する個別最適な学びと、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす協働的な学びなど、「令和の日本型学校教育」を意識した研究テーマを設定している学校が多くあることが伺える。

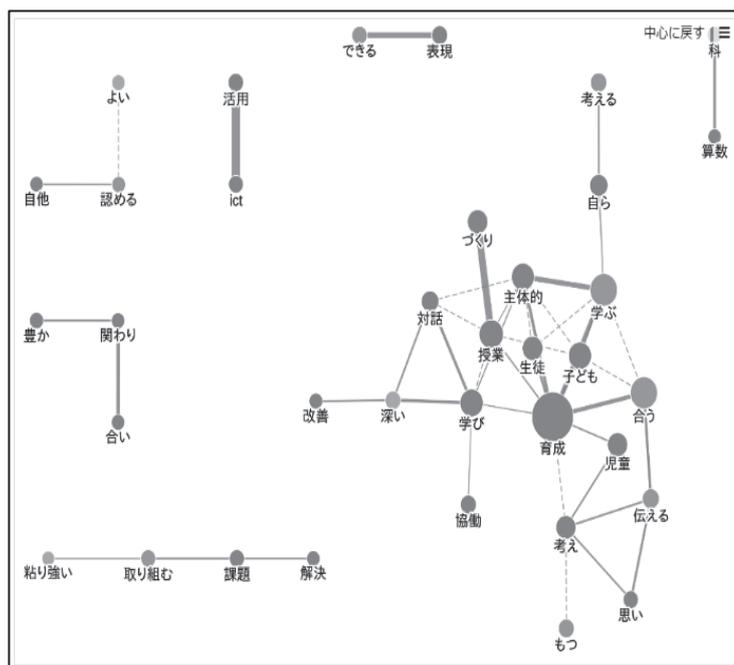


図2 校内研究テーマに関する共起キーワード

研究テーマを決める時期として、図3のように、前年度のうちを決めた学校が半数程度あることが分かった。「昨年度のうち」、「4月」、「5月」を合わせると、93%の学校が5月までに研究テーマを決めていることが明らかになった。

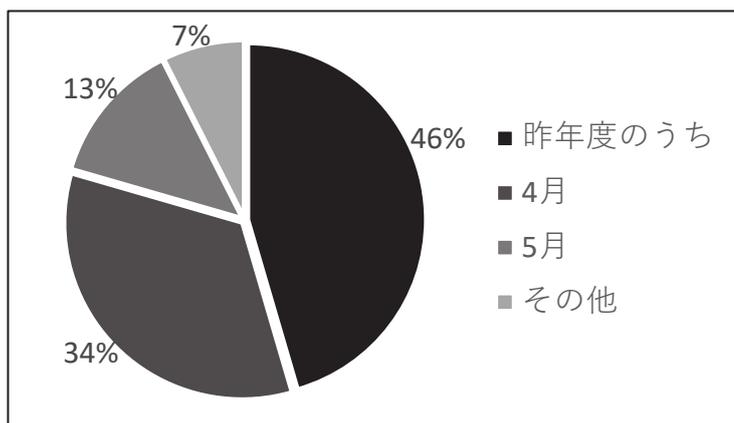


図3 校内研究テーマを決めた時期

研究テーマを決めた理由や経緯については、図4のように、「学校の課題を解決するためのテーマだから」が66%と最も多く、学校教育目標や目指す児童生徒像をはじめとした、学校経営方針に位置付けられた研究が推進されていることが分かる。また、「研究大会等での公開授業や実践発表に合わせたテーマだから」が20%あり研究大会等の開催をきっかけとして、そこでのテーマを基に教職員全員で研究に取り組む学校もあることが明らかになった。

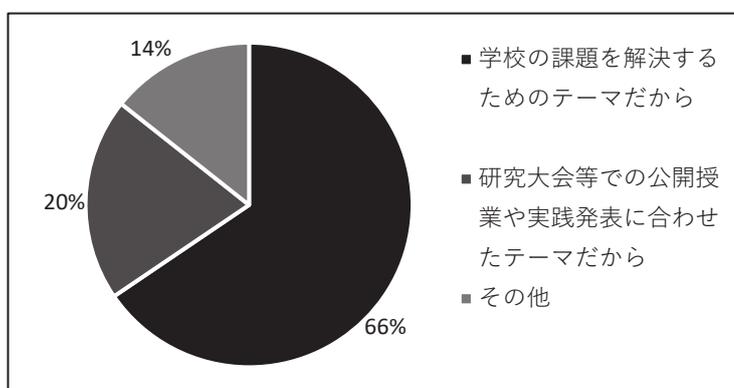


図4 校内研究テーマ設定の理由と経緯

イ 「教職員の研究に対する意識について」（質問番号4～6）の結果と考察

質問番号4「教職員は校内研究に主体的に取り組んでいますか。」についての結果を図5、質問番号5「校内研究に対して、全教職員が共通認識のもと進められていますか。」の結果を図6、質問番号6「校内研究に対して教職員は年間の見通しをもって取り組んでいますか。」の結果を図7に示す。

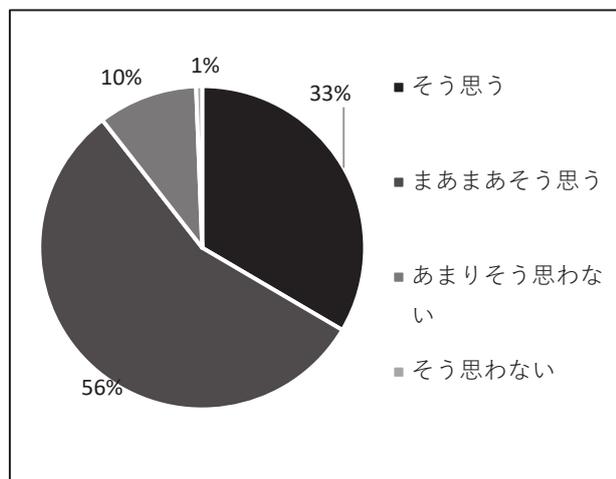


図5 教職員の主体的な取組

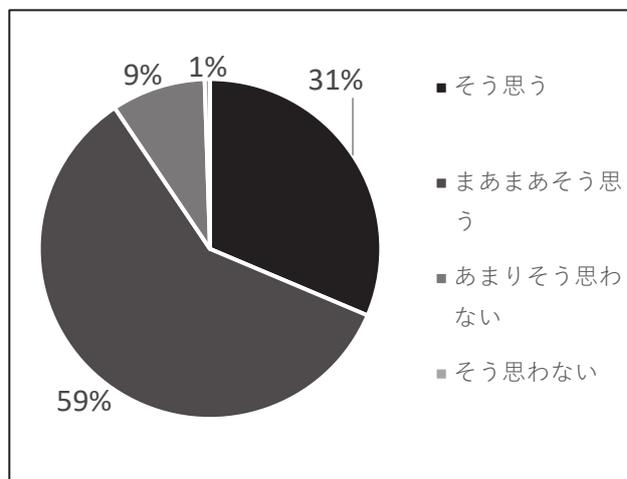


図6 全教職員の共通認識での進行

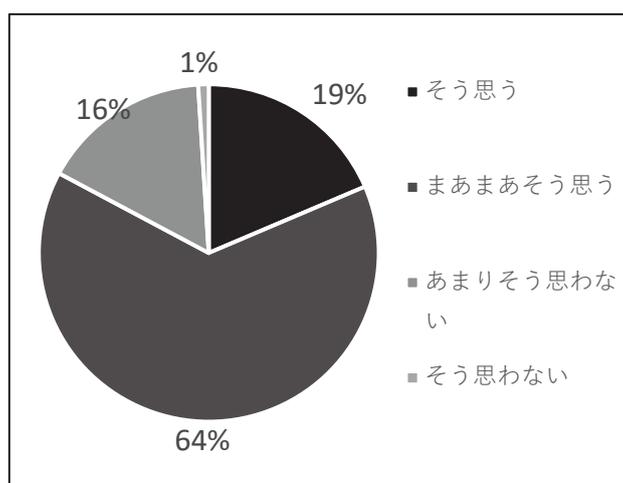


図7 教職員における年間の見通しをもった取組

「教職員の研究に対する意識」について、どの項目も肯定的な回答が多かった。「教職員が校内研究に主体的に取り組んでいる」に肯定的な回答をした学校は89%（図5）、「全教職員が共通認識のもと進めている」に肯定的な回答をした学校が90%（図6）あった。これは、質問番号2の回答であったように、半数近くの学校の研究テーマが4月の段階で決まっており、4月の職員会議等で研究テーマの共通認識が図られているためだと思われる。その一方、年間の見通しに対しては17%程度の学校が否定的な回答になっている（図7）。日々の多忙な業務の中、年間計画を作成する時間を確保することの難しさや、年間を見通して計画的に研究を進めていく難しさがあることが伺える。

ウ 「参考資料について」（質問番号7～9）の結果と考察

質問番号7「研究をはじめたり進めたりするにあたり、どのような資料を参考にしましたか（複数選択可）。」についての結果を図8、質問番号8「上記の資料はどのようにして入手されましたか（複数選択可）。」についての結果を図9、質問番号9「研究を進めるにあたり、どのような資料があればよかったですか。」についての共起キーワードを図10に示す。

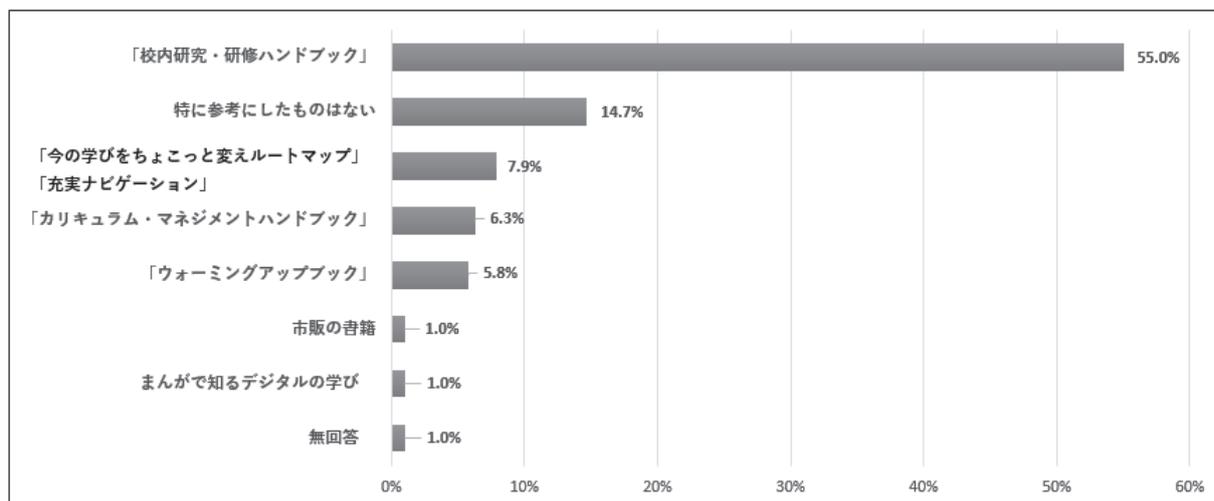


図8 参考にした資料

島根県教育センターが作成した「校内研究・研修ハンドブック」（2009）が55%（図8）という結果になり、研究を進めるにあたって多くの学校が、参考資料としていることが分かった。その一方、浜田教育センターが同時期に作成した「ウォーミングアップブック」については、5.8%と認知度が低く、活用頻度も低いことが明らかになった。これは、タイトルから、どのような内容が書かれているかを読み取れないことが一つの理由であると考えられる。本研究では、タイトルから何について書かれている冊子であるかが分かり、手に取ってもらいやすいものとなるよう検討を行う必要がある。

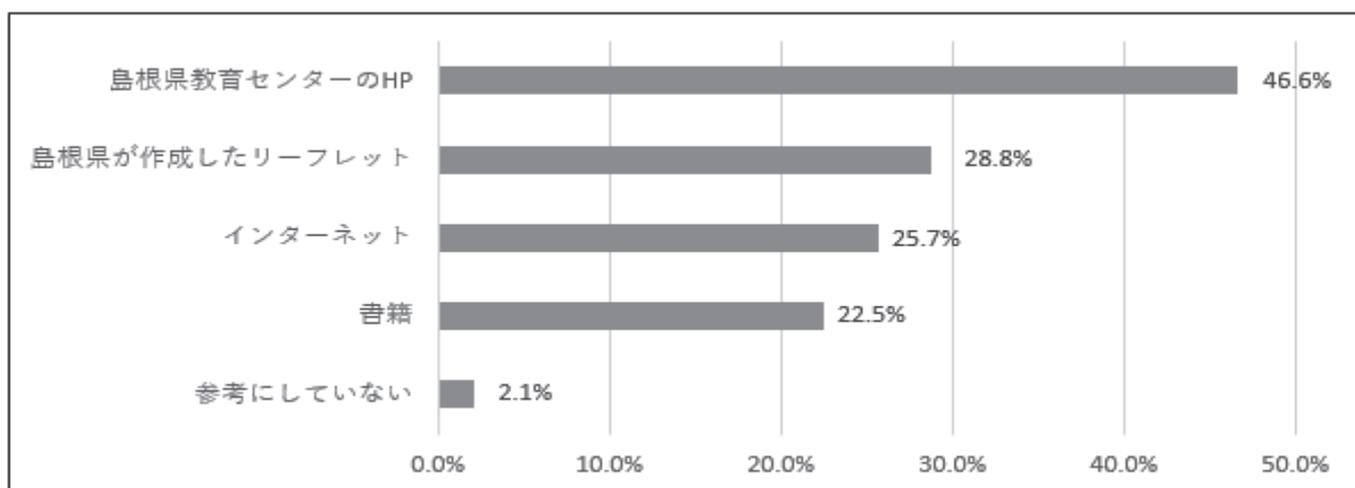


図9 資料の入手方法

島根県教育センターのHPや島根県が作成したリーフレット等の資料を活用しているとの回答が多かったが、インターネットや書籍から研究に関する資料を入手している場合もある(図9)。校内研究の在り方が多様化してきている中、アンケートの記述からも様々な資料を求める声がある。文部科学省や国立教育政策研究所が作成している資料をはじめ、校内研究に関するWebサイトや書籍等もあわせて紹介していく必要がある。

図10の共起キーワードからは、【進めやすい】【使いやすい】に強い共起があり、研究の手順や進め方の具体例が分かりやすく書かれている資料が求められていることが分かる。また、【協議】【対話】【取り入れる】の共起からは、対話を取り入れた研究協議の進め方の事例も求められていることが分かる。その他にも、「他校や他県の研究テーマや実践事例」を知りたいという意見や、「現行の学習指導要領に即した学習指導案の書き方」を知りたいという意見がみられた。

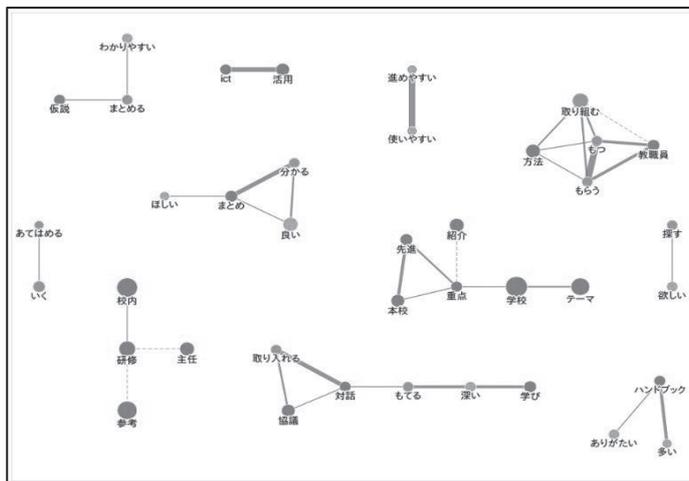


図10 求めている資料に関する共起キーワード

エ 「研究の成果等について」(質問番号10~14)の結果と考察

質問番号10「校内研究の効果を以下からお選びください(複数選択可)。」についての結果を図11、質問番号11「校内研究について課題に感じることを以下からお選びください(複数選択可)。」についての結果を図12、質問番号12「校内研究は教職員にとって良い学びの機会となり、児童生徒や日々の仕事に還元されていると感じますか。」についての結果を図13、質問番号13「(自由記述)校内研究を充実させるためにはどのようなことが必要だと思いますか。」についての共起キーワードを図14、質問番号14「(自由記述)校内研究を充実させるためにはどのようなことが必要だと思いますか。」についての共起キーワードを図15に示す。

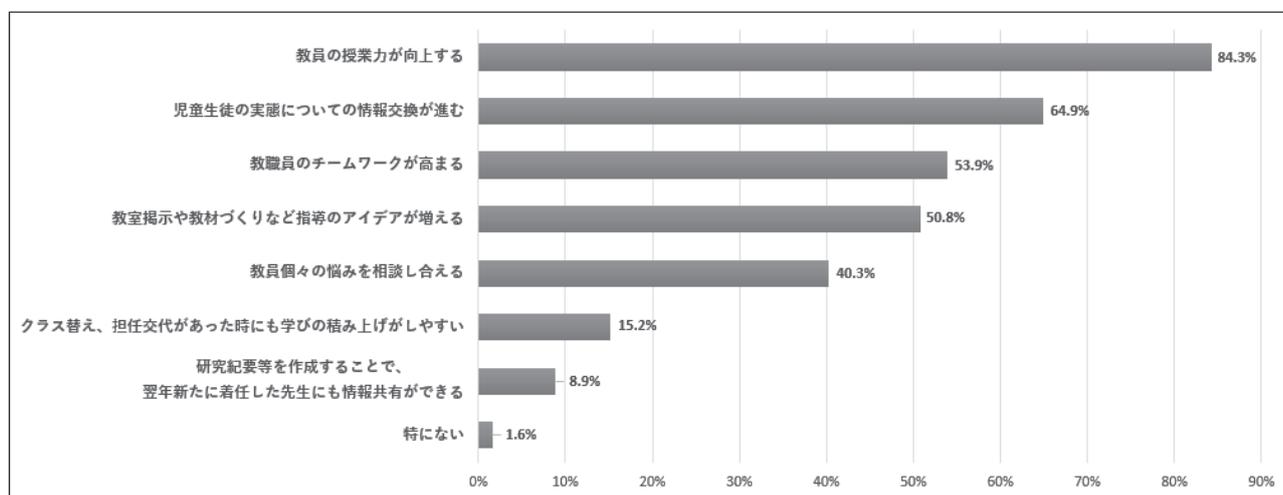


図11 校内研究の効果

校内研究の効果について上位の3項目では、「教員の授業力が向上する」が84.3%、「児童生徒の実態についての情報交換が進む」が64.9%、「教職員のチームワークが高まる」が53.9%となった(図11)。教師の授業力向上が期待できるだけでなく、教室掲示や教材づくりを通して、教職員間の対話が増えていると感じる研究主任が多いことが読み取れる。「教職員のチームワークが高まる」の項目が高い理由として、校内研究を進める過程で教職員間の対話や協働が増え、教職員間の連携が強化されることが要因として考えられる。校内研究に取り組むことの成果として、研究自体の成果だけでなく、教職員のチームワークを高める効果があることが明らかになった。

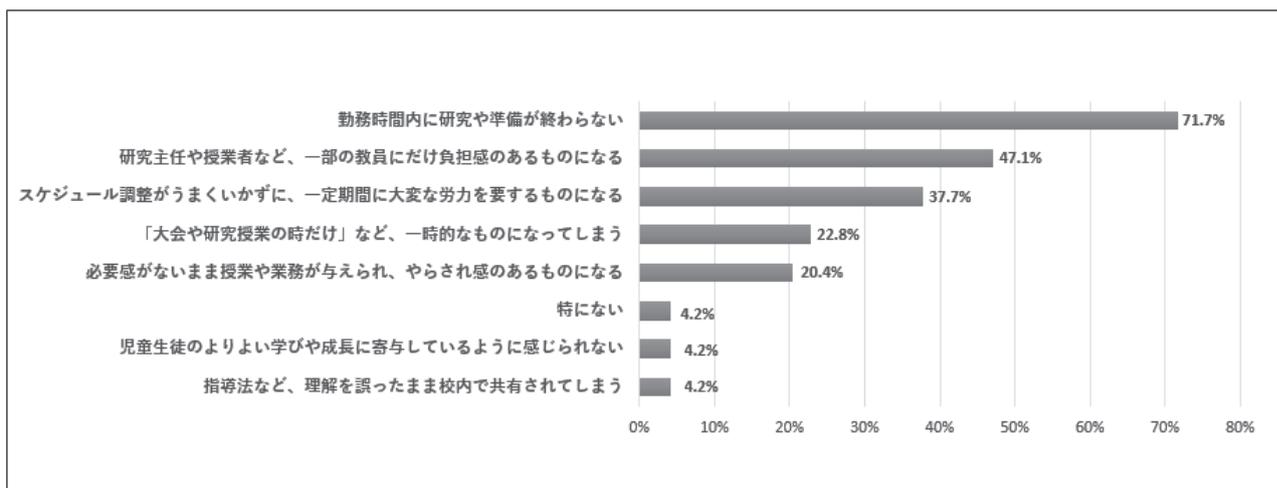


図12 校内研究の課題

課題について、上位の3項目では、「勤務時間内に研究や準備が終わらない」が71.7%、「一部の教員だけに負担感がある」が47.1%、「スケジュール調整が難しい」が37.7%となった(図12)。課題として取りあげられたものは多岐にわたるが、上位に挙げられた項目からは、研究主任が研究や研修の準備やスケジュールの調整などに多くの時間を割いており、多忙感を感じていることが推測できる。校内研究に関する業務の全てを研究主任が行うのではなく、どのようにしたら教職員を巻き込んで研究を進められるのかを考えることが、充実した校内研究を進めるためのポイントになることが示された。

校内研究における教職員や児童生徒への影響については、肯定的な意見が94%という結果になった。校内研究は教職員の学びとなり、それが子どもたちへ還元されていると実感をもつ研究主任が多いことが分かる。研究主任だけでなく、全教職員が取り組んでよかったと思えるような校内研究の在り方について考えていく必要がある。

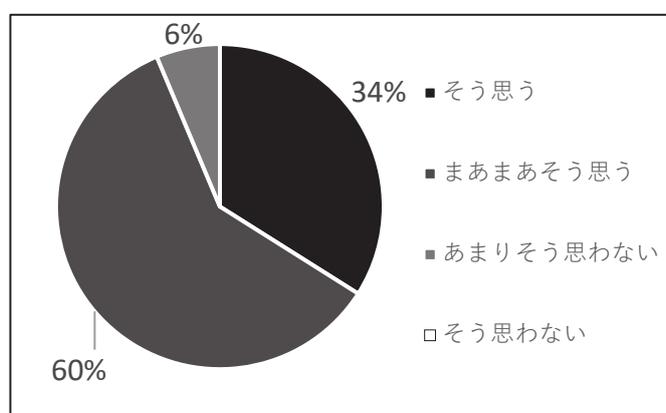


図13 教職員と児童生徒への影響

自由記述「校内研究を充実させるためにはどのようなことが必要だと思いますか。」の回答は、以下の5つに集約される。

- ・「年間計画やスケジュール調整の重要性」

質問番号11の回答にもあったように、日々多くの業務を抱えながら研究をしているため、年間計画を立てたうえで、研究を進めながらスケジュールの共有と修正を行うことが必要であると感じている研究主任が多くいることが分かる。

- ・「組織的な取組」

共起キーワードとして、【共通理解】【図る】に強い共起があり、【全員】【取り組める】が共起している（図14）。校内研究は全教職員で取り組むもので、研究主任や授業者だけでなく、チームでの教材研究や振り返りが重要である。役割分担や研究だよりの発行等を通じて、教職員全員が見通しをもって取り組むことが求められる。

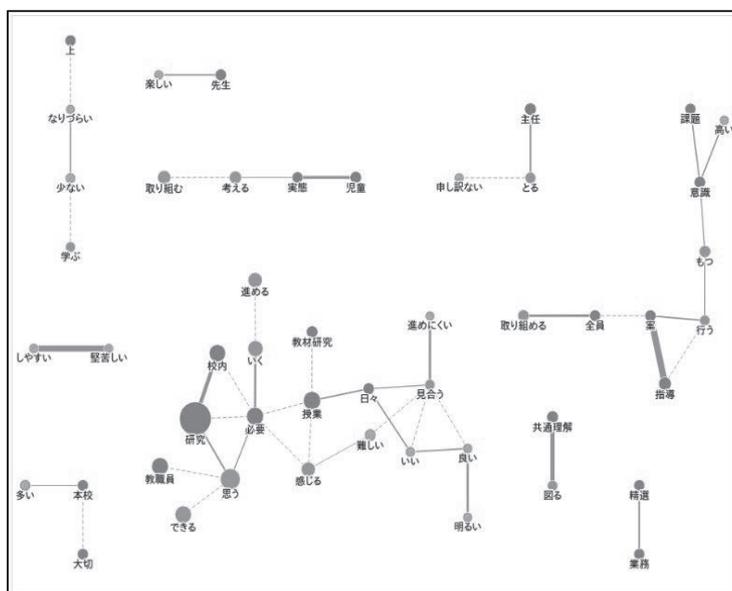


図 14 校内研究の充実に必要なことに関する共起キーワード

- ・「教職員の主体性と必要感」

教職員が主体的に研究に取り組むためには必要性を感じる事が重要であり、学校の課題を把握するとともに、それを自分事として捉えられるような工夫が必要である。

- ・「コミュニケーションの促進」

教職員間での自由な意見交換や外部からの助言を受けることで研究の方向性が明確になることから、教職員間で共通理解を図ることが大切である。

- ・「業務の精選と時間の確保」

【精選】【業務】の共起からも教職員の多忙感を解消するためには、業務の精選が必要であり、研究にあてる時間を確保することが求められる。特に、教材研究や授業の振り返りのための時間が重要である。

このように、校内研究を進めるためには、「年間計画やスケジュール調整」、「組織的な取組」、「教職員の主体性と必要感」、「コミュニケーションの促進」、「業務の精選と時間の確保」が不可欠であるという意見が見られた。これらの実現を目指すことが、校内研究の充実につながると考える。

自由記述「研究主任として思われることがありましたらお書きください。」についての回答は、以下の5つに集約される。

- ・「教育センターが主催する研修の有用性」

「年度当初に行われた小・中学校研究主任等研修の内容が参考になった。」等の意見から、教育センターで実施される研修が研究主任の不安を和らげる効果があったことが分かる。各校に一人しかいない研究主任が、他校の実践を知ったり、悩みを共有したりすることで安心して研究を進められるという理由から、年間を通した研究主任等への研修は有効であるということが分かる。

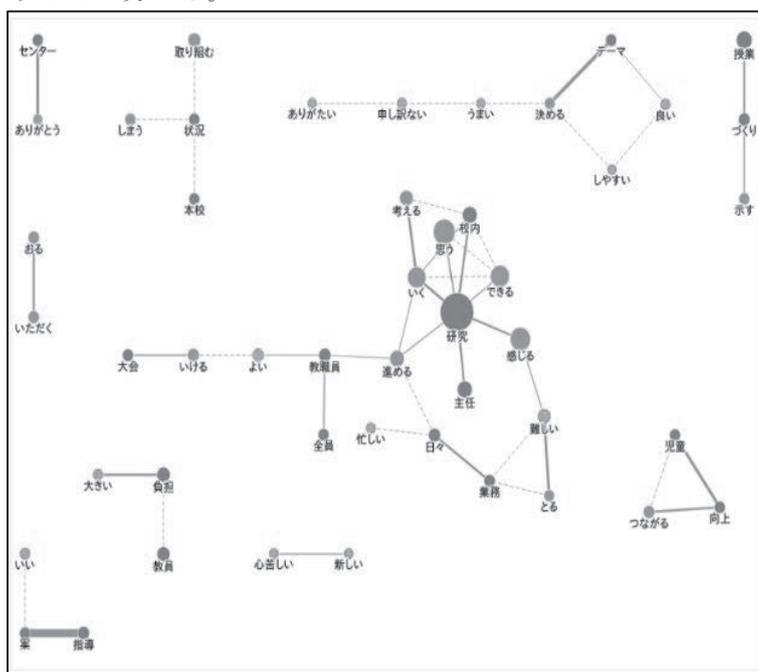


図15 研究主任として思うことに関する共起キーワード

- ・「業務の多忙さと研究の進行」

教職員は多忙であり、研究を進めることが難しいと感じている。また、共起キーワードとして、【日々】【業務】に強い共起が、【日々】【忙しい】、【業務】【難しい】にも共起がみられた(図15)。「日々の業務の忙しさをそれぞれ抱えている中で、研究をどのように進めるのが良いか悩んだ。」等の記述もあることから、本研究の成果物には研究の進め方についての項目を立て、分かりやすく解説する。そうすることで、研究や実践に充てる時間を確保できるようにしていきたい。

- ・「教職員の負担感」

教職員が研究に取り組む際の負担感が強く、勤務時間外に研究を行うことが多くなっている現状も記述から見られる。教職員間での協力が必要であり、負担感を軽減するための調整が求められていることが明らかになった。

- ・「研究テーマの設定の難しさ」

「その年の研究テーマを決める時期はいつが最適か、その点に難しさを感じた。」等の記述から、研究テーマの設定が年度初めに行われることの難しさを感じていることが分かる。県内の小学校、中学校、義務教育学校では、研究テーマ設定をいつ、どのように決定しているかをアンケート結果から示していきたい。

・「研究の意義と今後の展望」

「教職員一人一人は成長したいと思い日々の授業に取り組んでいる。校内研究がそのお手伝いができるためのものにしたいと今年度取り組んだ。」という記述から、研究を通して教職員が成長し、教師の授業改善に繋げようとしていることが分かる。一方で、「研究を負担に感じている教職員がいることも確かである。本来ならば授業づくりを一番に重視したいところ。」という意見もあることから、「研究」と「授業づくり」が連動しきれていない状況にあることも明らかになった。

アンケート結果から明らかになったことを次にまとめる。

- ・約半数の学校が前年度のうちに研究テーマを決めており、66%の学校が、学校の課題を解決するためのテーマを設定している。
- ・小学校では、教科や領域に関する研究テーマが多く、中学校は昨今の教育課題に関する研究テーマが多い傾向がある。
- ・教職員の研究に対する意識は高く、約9割の学校が、全教職員が共通認識のもと、主体的に取り組んでいると回答している。
- ・55%の学校が、島根県教育センターが作成した「校内研究・研修ハンドブック」を活用している。また、島根県教育センターのHPや島根県が作成したリーフレットも活用している。
- ・研究の成果では半数以上の学校が、「教員の授業力が向上する」、「児童生徒の実態についての情報交換が進む」、「教職員のチームワークが高まる」と回答している。
- ・課題については、「勤務時間内に研究や準備が終わらない」、「一部の教員にだけ負担感のあるものになる」、「スケジュール調整がうまくいかない」という回答が多くある。
- ・研究を進める際に必要な資料として、進めやすく使いやすい資料、研究協議の進め方の事例、現行の学習指導要領に即した学習指導案の形式に関する資料を求める回答が多くある。
- ・自由記述では、「業務の多忙さ」、「研究テーマの設定の難しさ」、「年間計画やスケジュール調整の重要性」等に関する記述が複数あることから、日常の業務の多忙さから研究にあてる時間が確保できていないことや、研究を進めるにあたり、具体的な方法が分からなくて困っている研究主任が多くいることが分かる。

以上の結果から、以下に示す要素を取り入れ、初めての研究主任にも分かりやすい冊子を作成することとした。

- ・研究の進め方について、「研究主題の設定の仕方」、「年間スケジュール例」を含めテーマごとに具体的記述を行う。
- ・各教科に関する「学習指導案の書き方」について具体例を挙げながら例示する。
- ・イラストを用いて対話形式で展開することで、読者の目線の誘導を行い、読みやすい冊子にすると同時に、具体例を示すことで進めやすく、使いやすい冊子を目指す。
- ・短時間で知りたい頁や情報にアクセスできるように、ハイパーリンクを活用する。
- ・外部の知りたい情報にアクセスできる、情報のハブ的役割となる冊子を目指す。

(3) 研究主任に向けた冊子「はじめての研究主任ガイド」の作成

① 作成の基本方針

本冊子作成の目的は、初めて研究主任を務める教員が使いやすい冊子を提供することで、各学校の校内研修の充実を図ることである。その目的を達成するため、今年度の島根県内の小学校、中学校、義務教育学校の研究主任へのアンケート結果から聞こえてきた研究主任の声を大切にし、研究の進め方や学習指導案の書き方を中心とした冊子を作成することにした。この冊子(図16)では、表3にあるように、「研究主任の『声』から考える」、「研究の進め方を考える」、「学習指導案の書き方を考える」の3つの項目についてアンケートの結果を踏まえて解説をしていくことを作成の基本方針とした。



図16 「はじめての研究主任ガイド」の表紙

表3 「はじめての研究主任ガイド」の構成

ア 研究主任の「声」から考える	・全ての教職員が校内研究に参加しないといけないの？
	・研究主任の仕事とは？
	(ア) 研究テーマは、いつどうやって決めているの？
	(イ) 研究を進めるにあたり、どのような資料を参考しているの？どうやって入手したの？
	(ウ) 研究主任は、校内研究の効果や課題をどう感じている？児童生徒のためになっているの？
	(エ) 校内研究を進めるために必要なことは？
イ 研究の進め方を考える	・校内研究を進めるにあたって
	(ア) 校内研究の組織
	(イ) 研究構想の立て方
	(ウ) 子どもの実態とめざす子どもの姿
	(エ) 手立て・内容(研究仮説)
	(オ) 研究の目的
	(カ) 研究主題
	(キ) 検証方法
	(ク) 研究計画
	(ケ) 研究授業
	(コ) 授業協議
	(サ) 研究授業
	(シ) 研究のまとめ方
(ス) 研究のまとめの作成例	

ウ 学習指導案の書き方を考える	・学習指導案の役割
	(ア) 学習指導案作成手順例
	(イ) 学習指導案例
	(ウ) 単元(題材/主題)名
	(エ) 教材(題材/主題観)
	(オ) 児童生徒観
	(カ) 指導観
	(キ) 単元(題材)の目標
	(ク) 単元(題材)の評価規準
	(ケ) 単元(題材)の指導と評価の計画
	(コ) 本時の学習(目標&評価基準)
	(サ) 本時の学習(展開)
	(シ) 「学習指導案の書き方」に関する資料

② 研究主任の「声」から考える

ここからは、冊子の3つの項目について、主だった工夫を述べることにする。

研究主任がどのようなことで悩み、どのようなことに喜びを感じているかが、アンケート結果の分析により明らかになった。

そこでまずは、校内研究の価値や研究主任の仕事について解説した後、研究テーマを決める時期や方法など、はじめの一步となるところからアンケート結果をもとに伝えることとした。

ここでは、アンケート結果から分かったことを4つの項目に整理し、キャラクター同士の会話を通して質問と解説を行うことで、読み手が読み進めやすくなるように工夫を行った。

ア Q&A 方式での解説

冊子の全編を通して、読み手が会話に沿って読み進めることができるように、質問に対して解説をするという形に統一した(図17)。また、解説の中で一番伝えたい情報を太字にして下線を引くことで、注目してもらえるように工夫を行った。

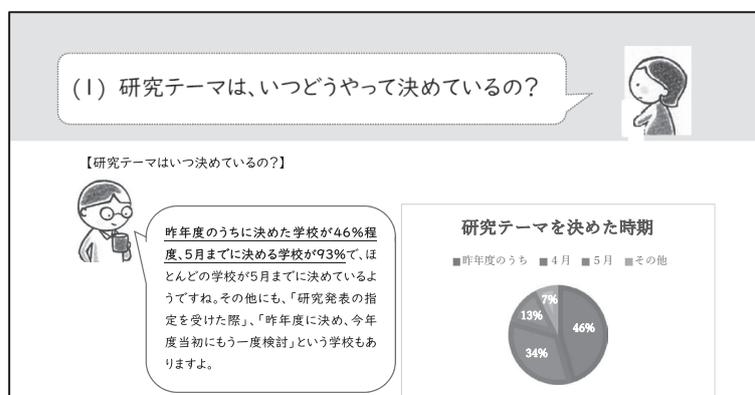


図17 Q&A 方式での解説

イ 情報のハブ的機能

アンケートの自由記述には、「こんな情報があったらよかった」というような、知りたい情報や欲しい情報について多くの記述があった。それらの回答を項目ごとにまとめ、「研究主任の『声』」として表に記載した（図18）。また、その声に答える形で、表の右側にこの冊子のどのページに書かれているか、または何を見るとその声に関する情報が得られるかを示した。示し方は、二次元コードやハイパーリンク機能を使用することとした。この冊子で全てが完結するのではなく、文部科学省やしまね教育情報 web（エイオス）のホームページ等に簡単に接続できるようにすることで、研究主任の見識が広がるよう工夫を行った。

研究主任の声	参考資料について
<ul style="list-style-type: none"> 研究の進め方(テーマの決め方、仮説の立て方、検証方法、研究のまとめ、年間の見通し、研究協議の進め方)を知りたい! 	<ul style="list-style-type: none"> 本書のp8~にまとめました。 60 本書を作成するにあたり、島根県以外の行政機関が作成したものを参考にさせていただきました。「参考文献」(p35)もご参照ください。 60
<ul style="list-style-type: none"> ICT 活用の実践例や、教科等に関する実践が知りたい! 	<ul style="list-style-type: none"> StuDX Style (スタディーエクスタイル) 文部科学省 しまね教育情報 Web (EIOS)
<ul style="list-style-type: none"> 教育改革に関する新しい資料が見たい! 校内研修でそのまま使える動画やスライド資料が欲しい! 	<ul style="list-style-type: none"> 文部科学省 HP

図18 情報のハブ的機能

ウ 実際の「声」から

アンケートに記述のあった声や要望についての記載を行うことを大切にしました。「他校の校内研究のテーマを知りたい」の声には、県内の学校の研究テーマをそのまま記述することにした（図19）。そうすることで、読み手が自校の研究を始める際、イメージをもちやすく、はじめの一步を踏み出しやすくなると思った。また、「校内研究を進めるために必要なことは何か」の声には、先輩の研究主任の思いを知ることで、今後の見通しを立てやすくなることと考え、アンケート回答から分かった研究主任の声を、キャラクターのセリフに乗せて届けることとした。

実際の学校の研究テーマを以下に記しました。様々なテーマで研究主題を立てている学校があることが分かります。研究主題の設定の仕方については、こちら **JUMP!** を参考にしてください。

- 豊かな心と確かな力を身につけるための主体的・対話的で深い学びの追究 ~ICT を活用した実践を通して~
- 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と学びに向かう生徒の育成 ~ 授業と家庭学習を効果的につなげた取組 ~
- 思考力・判断力・表現力を高め合う子どもの育成 ~各教科等の「見方・考え方」を働かせた授業づくりの実践から~
- 自分の思いや考えを伝え合いながら、考えを深めようとする生徒の育成~人間関係づくり・集団づくりを基盤として~
- 「学びをつなぐ、深める子どもの育成 ~個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通して~
- 自他を大切に支え合おう中で、向上していくこととする生徒の育成~人権教育を通して~

4 校内研究を進めるために必要なことは?

【研究主任の声】

年間のスケジュールを計画、提示し取り進む予定だったが、日々のことと追われ、計画通りにいかないことが多かった。年度当初、また1学期の間にスケジュールを修正、共有して推進していくことが必要だったと今は感じています。

全教職員で取り組んでいるという組織的な取組にすること。授業者だけでなくチームで教材研究をしたり、授業後も参観者が学んだことを自身の授業づくりに生かしたりできるようにすること。年間計画を具体的に作成し、全員が見通しをもって取り組めるようにすること。全員に役割があるように分担したり、全員で共有できるように研究便りを発行したりすることが必要です。

図19 実際の「声」から

③ 研究の進め方を考える

アンケートから、多くの研究主任が校内研究を進めるにあたって参考になるもの（校内研究の手引き等）を求めていることが明らかになった。また、初めて研究主任を任され「校内研究をどのように進めていけばいいのか」と不安に感じていることも読み取れる。その他にも、「他に優先すべき事柄があり、校内研究に取り組む時間を生み出すことが難しい」という記述も見られた。そこで、以下のポイントを意識して研究の進め方をまとめた。

ア PDCA サイクルを意識した構成

学校教育目標の達成に向けて、校内研究を計画に基づいて実施し、成果と課題を検証して、次の計画に向けて改善するというPDCAサイクルを1つの方法として示し（図20）、この流れに沿って、研究の進め方を示した。

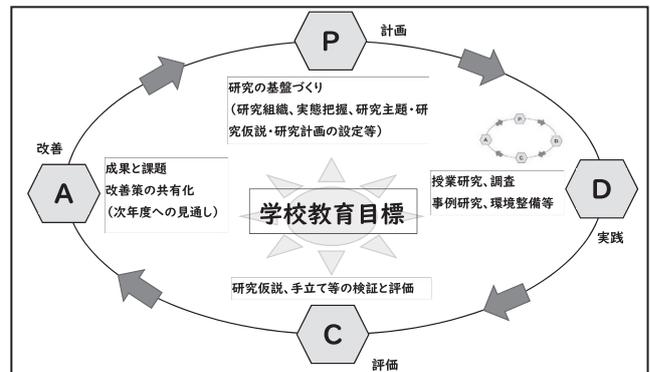


図20 PDCAサイクルを意識した構成

イ 研究構想の立て方

令和6年度の小・中学校研究主任等研修では、どのような研究を、どのように進めていくのかの構想づくりをする際に利用できるよう、図21のような「研究構想シート」（浜田教育センター作成）を使用した。この項目では、「研究構想シート」を使って、研究構想の立て方の具体を示すこととした。また、文章でも示すことで、手順をイメージしやすくするように工夫を行った（図22）。

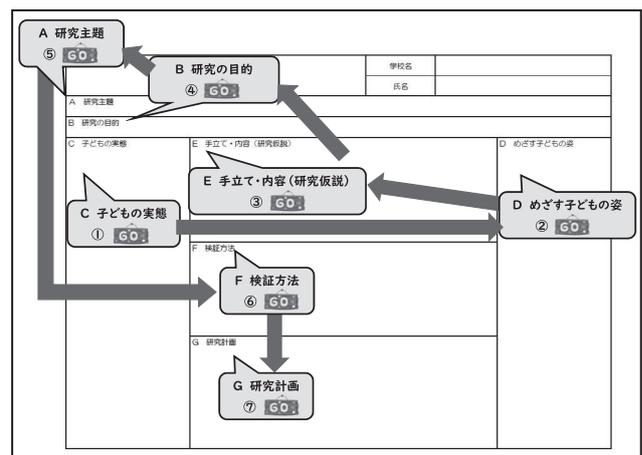


図21 研究構想の立て方

各学校には「学校教育目標」が設定されており、どのような子どもを育てるのが示されています。まず、目の前の子どもたちをよく見ていると、良い点や課題が見えてきます。これが、①「C子どもの実態」です。すると、学校教育目標と子どもの実態の間にずれがあることに気づきます。そこで、どのような子どもの姿をめざすのか、②「Dめざす子どもの姿」を明確にしていきます。そしてその姿を実現するために、作戦つまり③「E手立て・内容（研究仮説）」を立てていきます。もちろん、子どもたちの良い点を伸ばすための③「E手立て・内容（研究仮説）」を立ててもかまいません。研究仮説について議論し設定された後、④「B研究の目的」、⑤「A研究主題」を設定します。研究主題は、研究仮説を端的に表したものとなります。次に、⑥「F検証方法」、⑦「G研究計画」が設定され、研究構想が完成します。

図22 文章での手順解説

ウ 年間スケジュールの例示

先述したように、学校の現状として、他に優先すべき事柄があり、校内研究に取り組む時間を生み出すのが難しいと感じていることが明らかとなった。そのため、行事等も含めて1年間の学校全体の動きを確認し、一人一人が研究に対して見通しをもって取り組むことができるよう、研究計画を示した(図23)。また、負担なく作成できるよう、シンプルな計画を例示することとした。

エ 授業研究と研究協議

授業研究でも、PDCA サイクルを回していくことが重要である。授業者だけが、負担を感じないように、教材研究や、学習指導案の検討等、チームで取り組めるような体制を作ることが研究主任に求められる。また、授業参観の視点、研究協議の進め方等、事前に検討しておくとうい。研究主任として、授業研究をどのように進めていけばよいのかをシートにチェックしながら進めていけるようまとめた(図24)。

研究協議のもち方は様々であるがゆえに、どのように協議を進めていけばよいか悩んでいるという声がアンケートから見られた。自分の学校に合った方法を見つけていくことができるように、ここではいくつかの視点を示すこととした(図25)。

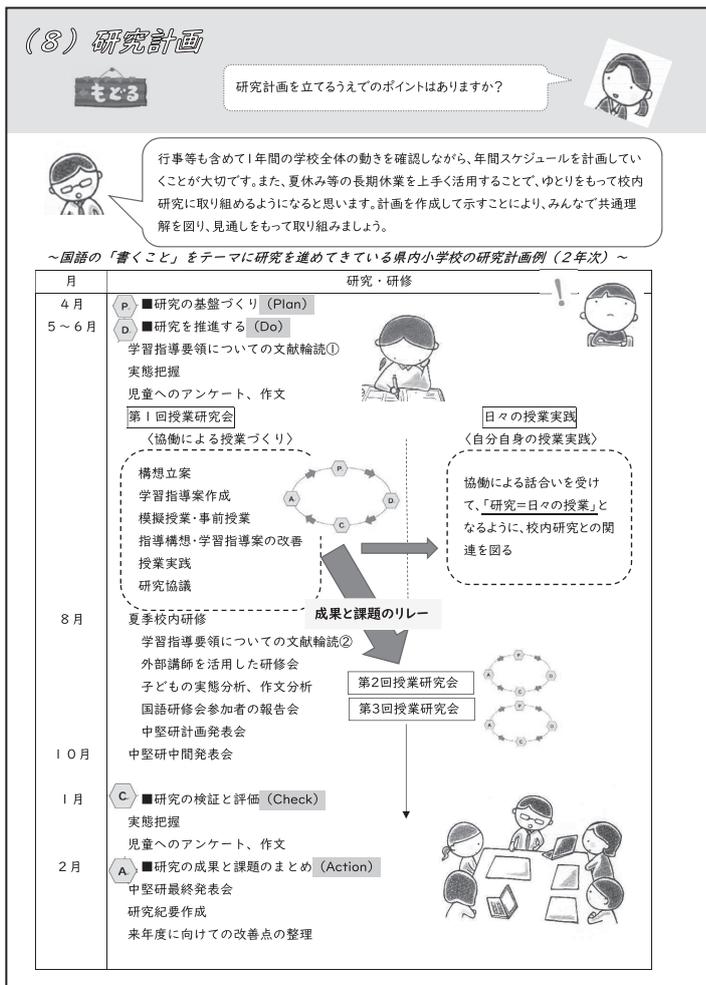


図23 年間スケジュールの例示

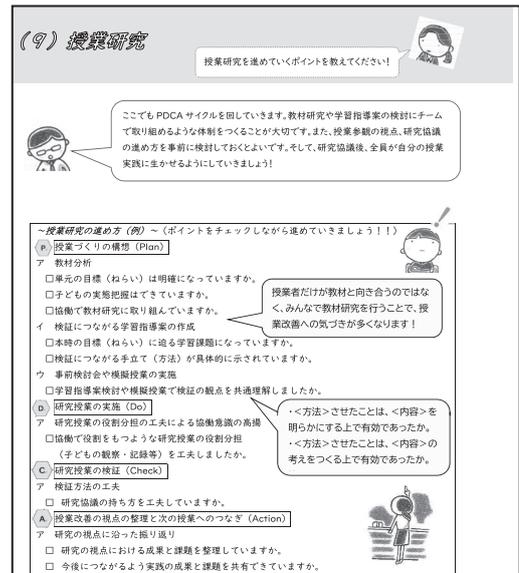


図24 授業研究

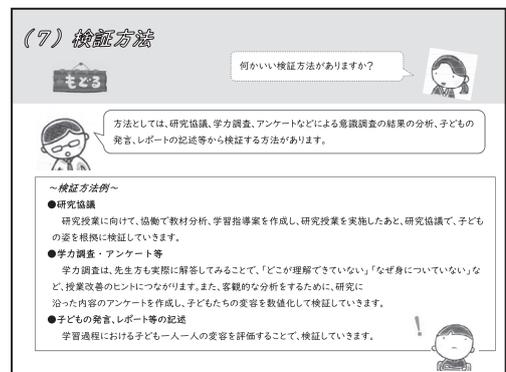


図25 研究協議

④ 学習指導案の書き方を考える

校内研究を進めていく中では、授業研究をするために学習指導案を書く機会が多くある。校種や教科・領域等によって形式や書き方は様々だが、学習指導案を作成することで、「何ができるようになるか（育成を目指す資質・能力）」を明確にし、児童生徒が「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」という授業の内容や手順を具体的に考えていくという方針は共通している。教師、児童生徒にとって「学びの地図」となるような学習指導案を作成するために、どのような手順で作成をしていけばよいのかを例示した。

ア 学習指導案作成手順例

「学びの地図」である学習指導案を作成するにあたって、このような順序で考えていけば道筋が分かりやすくなるのではないかと考え、手順を示すことにした（図 26）。しかし、学習指導案の作成手順に正しいものではなく、校種や教科・領域等によって考え方も異なる。一つの例であるということを示すことで、誤解を招かないように気を付けた。また、「大切なのは、単元で身につける資質・能力を明確にし、その資質・能力を身につけた児童生徒はどのような姿になるのか具体的にイメージすること、そして、そのためにどのような学習活動を行い、どのような指導の工夫や支援をしていくのかを考えることです。」と記述することで、何のために学習指導案を作成するのかについて再確認をできるようにした。

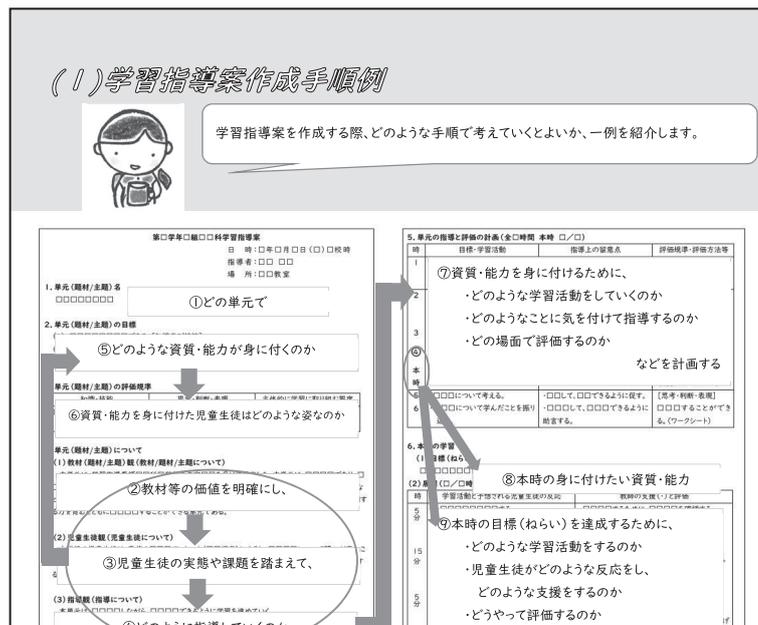


図 26 学習指導案作成手順例

イ 「チェックポイント」の提示

一つのテーマについて解説した後、「チェックポイント」の項目（図 27）を設け、本文に記載してある内容の要点を確認できるようにした。

チェックポイント

<input type="checkbox"/> 学習のねらいや内容が一目でわかるように明記されている。
<input type="checkbox"/> 単元名(題材名/主題名/議題)が教科、領域に応じた表記になっている。

図 27 「チェックポイント」の提示

ウ 学習指導案例

学習指導案の全体像の例を示すこととした。近年学校では、新規採用者の人数が増加傾向にある。新規採用者など学習指導案を作成した経験の少ない教員に学習指導案の作成例(図28)として示すことを想定し、イメージのしやすさを意識して作成した。また、特定の項目について詳しく知りたいという要望に対応できるように、ハイパーリンク機能を使用することで、知りたい情報を素早く見ることができるよう工夫した。

図28 学習指導案例

エ 学習指導案に関する資料

「学習指導案の書き方」に関する資料として、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」を中心に、二次元コードを示すことにした(図29)。「高等学校編」の記載と、「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」を掲載したのは、乳幼児期から高等学校までの学びの連続性を意識してほしいという思いからである。

二次元コードから移動できるようにすることで、手軽に参考資料を参照できるように工夫を行った。

図29 「学習指導案の書き方」に関する資料

5 おわりに

今年度始めのスタッフ会では、「学校が自走していくためにどのような支援ができるか」をテーマに、スタッフ全員で知恵を絞ることから始まった。今年度は、授業改善のための校内研究が進むように、小・中学校研究主任等研修が悉皆になったこともあり、研究主任を支援するための方策を考えることとなった。島根県内の小学校、中学校、義務教育学校の研究主任へアンケートをお願いしたところ、191校もの回答を得ることができた。回答を分析する中で、教職員の多忙さや校内研究を進める大変さなど、学校現場の「今」を知ることができた。そこで、私たちスタッフは、校内研究の充実を図ることで、学校が自走する力をさらにつけることができるのではないかと考え、研究主任を支援するための冊子を作ることとなった。

そのような経緯から、冊子は、アンケートに回答いただいた研究主任の「声」から作成したものであり、初めて研究主任になる教員にも分かりやすく、読みやすい冊子を作ることができたと考える。今後は冊子を多くの研究主任に活用してもらい、教職員が協働して実践に取り組む校内研究を進めていってほしい。

今後の課題は、冊子の検証についてである。今年度は冊子の作成に終始し、実際に学校現場での使用について検証を行うことができなかった。来年度以降は研究協力校を指定し、使いやすさや掲載情報等について検証を行なっていかなければならないと考える。

一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」と、対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」を実現するために、また、校内研究を活性化させるために、教育センターとしてどのようなことができるかを、冊子の検証を行うことを通してこれからも考えていきたい。

最後に、本研究に係るアンケート調査をするにあたり協力いただいた、島根県内の小学校、中学校、義務教育学校の研究主任の先生方に感謝の意を表したい。

なお、本研究は、島根県教育センター浜田教育センター研究・研修スタッフ 松田淳、青木喜代子、片岡靖典、品川佳代、中村奈緒美、永安裕子、新屋泉、森脇雅志が共同で行ったものである。

【引用文献】

- ・中央教育審議会（2022）「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00004.htm

（2025. 1. 16確認）

【参考文献】

- ・澤井陽介（2024）校内研究のつくり方～教師自らがともに学ぶ主体的・対話的で深い研究を実現する！～ 東洋館出版社
- ・村上聡恵・岩瀬直樹（2020）「校内研究・研修」で職員室が変わった！～2年間で学び続ける組織に変わった小金井三小の軌跡～ 学事出版
- ・水戸部修治（2020）教材研究から学習指導案まで丸ごとわかる！小学校国語 研究授業パーフェクトガイド 明治図書
- ・葛原順也・花岡隼佑（2024）ごく普通の公立小学校が校内研究の常識を変えてみた 明治図書
- ・丸岡慎弥（2023）研究主任 365日の仕事大全 明治図書
- ・ユーザーローカルテキストマイニングツール（<http://textmining.userlocal.jp/>）による分析

